

## 建築創造における「聖性」の認識について

### - 哲学的視点を通して -

#### On the recognition of "sanity" in architectural creation

#### - Through a philosophical point of view -

○力武瑞穂<sup>1</sup>, 田所辰之助<sup>2</sup>

\*Mizuho Rikitake<sup>1</sup>, Shinnosuke Tadokoro<sup>2</sup>

How does architecture exist in human perception? In this study, I refer to past motives of architecture creation, preceding philosophical anthropology, philosophical space theory, discourse to architecture, and aim to investigate essential common consciousness for people's architecture from the philosophical thinking through our own consideration including modernity.

#### 1. はじめに

建築と人間はどのような関係性を持って存在しているのか。様々な分野で物質的意義が危うくなっている現代において、建築というものは人間の認識の中でどのように存在しているのか。

現代社会において、個人による認識は様々であると考えられるが、本稿では、建築に対する人々の本質的な共通意識の再考を目的とする。

また、現代社会全体において、機械技術の発展、人口の過密化などに起因する人間の非人格化、画一化、人間相互関係の隔絶によって、人々は本質的な人間性、個人としての人格を喪失しつつあるのではないかと考える。そういった状況を踏まえても、人間の認識自体に焦点を当て、考究を行うことは現代の時代状況を打開する可能性を孕むと考える。

#### 2. 研究方法

本研究では、まず、過去に人々がどのような動機をもって建築を創造してきたのかを明らかにするため、建築の発生に関わる始源的な要因である“宗教”や“貯蔵・灌漑設備”、“聖なる場”について研究対象とする。

また、普遍的な視点において研究目的を果たす際、“人間”自体の存在がいかなるものなのかを問い直し、そこから建築との結節点を探ることが一解に繋がると考え、先駆の哲学者たちが取り組んだ哲学的人間学や哲学的空間論、建築への言説を中心に参照し、考究を進める。

#### 3. 宗教

##### ・特別な内部、特別なファサードの発生

旧石器時代、人間は主に狩猟中心の生活の中で、自分たちの生を繋ぎ止めるため、大地の動植物の豊産、人間の安産を祈り、地母信仰が生まれた。この人類最初の宗教である地母信仰により、“特別な内部空間”が

つくられた。(チャタル・ヒュルクの遺跡など) 新石器時代、農耕が始まり、そのことから地母神を支配するとされる太陽神を祀る太陽信仰が生まれる。この太陽信仰により、“特別なファサード(高さ)”がもたらされたとされている。(ストーン・ヘンジなど)

#### 4. 貯蔵、灌漑設備

##### ・非特別な建築の発生

人間の生活が農耕中心となり、生物的な個体としての時間スケール、日々の生活欲求などに基づいた生活時間をはるかに超えた時間をコントロールすることになり、はじめて定住が行われるようになる。人為的に開かれた自然、土地に、それを管理するための貯蔵設備や灌漑設備がつくられ、そこで人々を管理させるため、縛り付けるために定住住居が付属設備としてつくられた。非特別な建築の発生は、住みやすさなどの日々の欲求からではなく、むしろその前に、人々の欲求を固定する仕掛けがあったという。

#### 5. 聖なる場



Figure1. ストーンヘンジ



Figure2. プレセリ山地

人は、自然による様々な景観の中に神聖感を抱いてきており、現代でも多くのものが継承され残っている。人が感じ取る“聖なるもの”とそれが現れる空間、そしてそこから立ち上がる形態について興味深いと同時に、建築に通ずる概念が存在すると考える。

イギリス、イングランド南部にある環状列石(ストーンサークル)の遺跡であるストーンヘンジは、4500

年前につくられた画期的な建造物である。ストーンヘンジに使われた最古の石、ブルーストーンを産出した石切り場はプレセリ山地の東端、カーン・メニン周辺の露頭は粗粒玄武岩や頁岩であり、ストーンサークルやドルメン（支石墓）などの巨大な石のモニュメントがあることで古くから知られてきた。プレセリ山地の岩には同心円模様が刻まれており、「カップマーク」と名づけられていた。おそらく紀元前 4000 年ごろの人々は、天を突くように岩柱が立ち並び、独特の雰囲気に満ちたこの地を特別な“聖地”にとらえて、建造物を築いたといわれている。そして、別の場所でも同じ模様を建造物に刻みこみ、聖地を偲ぶものとしたのではないだろうかという。石切り場からストーンヘンジまでは最短ルートでも約 400 キロはあり、当時としては、かなりの大事業であっただろう。それでも、人々はプレセリ山地で感じた何か“特別なもの”を、イングランド南部まで運びたいと考えたのだといわれている。

## 6. 聖性

ここでは、建築をとりまくという点に限定せず、聖性の存在について研究を進めていく。まず、“聖性”、“聖なるもの”という言葉を私たちは通常、無条件に倫理的な意味で、例えば“完璧に善い”という特性を表す用語として理解することがあるが、ここでは、あるはっきりとした余剰部分を含み、概念的把握をまったく寄せ付けない“語りえぬもの”としている。この聖性の発生要因として、著書『聖なるもの』<sup>[1]</sup>の中でルードルフ・オットーは、ふさわしい表現として、「戦慄すべき神秘」、「魅するもの」という言葉を挙げている。「戦慄すべき神秘」について、時として我々の内部で困惑させるほど激しく心情を揺り動かし、支配するものがあり、それは、「恐れ」の感情と近似性を持っている。そこから出現する不気味さの感覚などが聖性の発生を促すと説明されている。また、戦慄すべきというはねつけるような要因に対して、他方では同時に、そしてあきらかに、ある特殊固有の惹きつけるような魅惑的なもの、つまり魅了するようなものといった要因が存在するという。

## 7. 哲学的人間学

人間は、自己が対峙する世界を知るだけでなく古くから自己自身を知ろうと願ってきており、人間の本質や世界における人間の位置付けなどを考察する学問として人間学は展開されてきた。ここでは、一例を挙げる。

### ・自然主義的人間論

ルソーは、文明化した社会のなかで存在している人間の根底に、その原型や根元的な本来の自然な在り方（人間自身の備えている、生まれながらのもの「本性」）を見ようとする姿勢をとり、著書『人間不平等起原論』<sup>[15]</sup>にて元々の人間の自然＝本性に関する議論を展開している。また、著書『エミール』<sup>[16]</sup>にて本性を備えて生まれてくる人間を、本性の自然に即して、育て、はぐくみ、どのようにしてより人間的な存在に陶冶していくか、人間の本質をより発展させ、完成させていくかという点で論じている。

### ・実存主義的人間論

ニーチェは、キリスト教的道徳を「奴隷の思想」として、伝統的な西洋の認識と文化の基盤、歴史全体に及ぶ批判をし、生の強弱という視点から人間を捉え直している。人間の活動原理、それだけでなく一切のもの活動原理を「生」に求め、生をもって推し量る限り、強い弱いという二者択一が存するのみで、人間の本質に関する従来の感性的か概念的か、物的か理性的かなどの基準は第二義的なものになるといった姿勢をとっている。

## 8. まとめと展望

宗教、貯蔵、灌漑設備、聖なる場、またそこから派生した“聖性”についての研究により、人間にとって聖性という存在が、古来においても現代においても、人間が理性を超えて欲する根源的な豊かさの一つであると考えられる。人間が聖性によって限りなく大地を求める姿は、建築の創造に至る動機と深く結びついているように思う。また、先駆の哲学者たちが説く人間論に関してさらなる思慮を深めるとともに、先行する哲学的空間論、建築への言説を参照することで、現代性を含む自らの考察を通じた哲学的思考から、人々の視点による建築に対する本質的な共通意識を再考する可能性を見出すことができると考える。

## 9. 参考文献

- [1]ルードルフ・オットー著、久松英二訳『聖なるもの』、岩波書店、2010年[2]野本寛一『神と自然の景観—信仰環境を読む—』、株式会社講談社、2006年[3]ロジェ・カイヨワ著、塚原史訳『改訂版 人間と聖なるもの』、株式会社セリカ書房、1994年[4]上野誠『日本人にとって聖なるものは何か』、中央公論新社、2015年[5]岡谷公二『原始の神社をもとめて—日本・琉球・済州島—』、平凡社、2009年[6]エドモンド・バーグ著、中野好之訳『崇高と美の観念の起原』、みすず書房、1999年[7]藤森照信『人類と建築の歴史』、株式会社筑摩書房、2005年[8]藤森照信、岡崎乾二郎『最後に残る建築は？』、『ザ・藤森照信』、井松志郎、株式会社エクスナレッジ、2006年、pp.119-131[9]多木浩二『生きられた家』、青土社、昭和59年[10]中村貴志『ハイデッガーの建築論—建てる・住まう・考える—』、中央公論美術出版、平成20年[11]James J. Gibson 著、古崎敬、古崎愛子、辻歌一郎訳『ギブソン生態学的視覚論—人の知覚世界を知る—』株式会社サイエンス社、1985年[12]オットー・フリードリッヒ・ボルノウ著、大塚恵一、池上健司、中村浩平訳『人間と空間』、株式会社セリカ書房、1988年[13]サン・テグジュペリ著、堀口大樹訳『人間の土地』、新潮文庫、昭和30年[14]谷口龍男、富永厚『人間とは何か—西洋近代・現代の人間論—』北樹出版、1992年[15]ルソー著、本田喜代治、平岡昇訳『人間不平等起原論』岩波出版、1985年[16]ルソー著、今野一雄訳『エミール（上）』岩波書店、1962年[17]山竹伸二『本当にわかる哲学』日本実業出版、2011年[18]ハイデッガー、オルテガ、ベグラー、アドルノ著、伊藤哲夫、水田一征訳『哲学者の語る建築』中央公論美術出版、2008年

Figure1(出展： <http://yuuma7.com/ストーンヘンジに行ってみた%E3%80%82%20行き方や謎を紹介/>)

Figure2(出展： <http://natgeo.nikkeibp.co.jp/nng/magazine/0806/feature01/>)